沖縄 ――島々の神 (3)

高橋六二

※これは前橋（本学紀要第三十二集・平成八年刊、第三十三集・平成九年刊）に続くものである。伊平屋島・伊是名島を取り上げることとした。

六、伊平屋島

1、野保ノヲヒヤ火神（公儀祈願所）（野甫村）

2、野甫ノロ火神（同）

3、大山御イベ（同）

神名、セロマン

4、アフリ嶽御イベ（同）

神名、アフリ森

5、銘賀瀬嶽御イベ（同）

神名、コシアテ森

右五嶽、由来不レ伝。

6、島尻大屋子火神（同）（島尻村）

7、阿波嶽御イベ（島中拝所）

神名、寄上森

此嶽、由来不レ伝。

8、我喜屋ノヲヒヤ火神（公儀祈願所）（我喜屋村）

9、我喜屋ノロ火神（同）

10、カタクマ嶽御イベ（同）

神名、コシアテ森

11、アメ嶽御イベ（島中拝所）

神名、西ノ森

12、カヤウ嶽御イベ（同）

神名、ノダテ森

13、神ノ嶽御イベ（同）

神名、アフリ森

右四嶽、由来不」伝。

14、田名ノヲヒヤ火神（公儀祈願所）

15、田名ノロ火神（同）

16、ヲツ川嶽御イベ（公儀祈願所）

神名、アフリ森

17、城嶽御イベ（同）

神名、コシアテ森

（田名村）

18、アサ嶽御イベ（島中拝所）

神名、コンダ森

19、三崎御イベ（同）

神名、アウサキ森

20、マセヤ嶽御イベ（同）

神名、アカラ森

右四嶽、由来不」伝。

伊平屋島・伊是名島は、『琉球国由来記』各処祭祀の項では、「伊平屋島」としてまとめてある。その中で村名から伊平屋島に該当するのが、ここに掲出したものである。その聖地は火神とイベから成っている。そして神名はイベにのみある。その神名はセロマンの外はみな「森」を称している。しかも「アフリ森」「コシアテ森」はそれぞれ三ヶ所に重複している。

3のセロマンはオモロ語のセルママであろうから、つまり火の神であろう。4・13・16の「アフリ森」のアフリは、『琉球国旧記』付巻之三に「涼傘森」とある。涼傘はリャンサンと言われ、縁に総の付いた大きな傘で中国伝来のものという。『琉球国由来記』巻十五・国頭間切・辺戸村に「アフリ嶽」があり、

昔、君真物出現之時、名帰仁間切、アフリノハナニ、冷傘立。

時コバウノ嶽ニ冷傘立、又アフリ嶽ニ立ト、申伝也。

とある。また高級神女三十三君の一つにアオリヤエがあり、涼傘の総が風にあおられるところから、煽りが涼傘の下に立つ神女をも意味するようになったという。「アフリ森」という神名はこれらと関わるものなのだろう。

5・10・17の「コシアテ森」のコシアテは腰当、『おもろさうし』巻十三―八八九に「きみのにせとのか　こしあてかみ　なりよわちへ」などとある。うしろだて・守護の意で、琉球では古くから広く用いられる語、聖地の森を言うこともある。

7の「寄上森」つまりヨリアゲは、寄り物の上がる海浜の意かといい、ヨリアゲモリの名は各地にある。11の「西ノ森」は方角による呼称だろうが、この「西」はイリ（西）なのかニシ（北）なのか。12の「ノダテ森」のノダテはオモロ語のノタテ（宣立て）、つまり神に祈る意であろう。18の「コンダ森」のコンダは『琉球国旧記』には「腓」とある。これだとコムラ、つまりふくらはぎということになる。身体の一部をもって言う神名として珍しいと思うが、「コシアテ森」と同様のものなのだろうか。久高島にはクゥンディガーという泉水があるが、そのクゥンディはオモロ語のコムデ、つまり組む手で両手の意なのかもしれない。コンダはそれに近いような響きもある。19の「アウサキ森」は『琉球国旧記』に「青崎森」とある。たぶんそれでよいのだろう。アオは聖地を示す語として一般的である。20の「アカラ森」のアカラはオモロ語に、明るく照り輝く美しさを言うものとして広くある。首里城内にはアカラタケがあり、久高島にもアカラムイという御嶽がある。

七、伊是名島

1、アカラ嶽御イベ（公儀祈願所）　（伊是名村）
神名、スヾノ森

2、川嶽御イベ（島中願所）
神名、アフリ森

3、トカイ嶽御イベ（同）
神名、コシアテノ中森
右三ノ嶽、由来不レ伝。

4、伊是名ミヤ御イベ（公儀祈願所　伊是名城内）
神名、伊是名森

5、高城ミヤ御イベ（同。伊是名城之内）
神名、スエノ森

6、大城ミヤ御イベ（同。伊是名城之内）
神名、真玉森

7、泉井

（伊是名村東之方海涯、岩掛ノ嶺ニ有リ。雨天且旱之時、水不」増不」滅。旱魃之時、女巫・掟神、女共召列、濬雨乞為二祈願一也）

8、セサンノヲヒヤ火神（公儀祈願所）

9、伊是名ノロ火神（同）

10、首里ヲヒヤ火神（同）　（諸見村）

11、ヤブサス嶽御イベ（島中拝所）

神名、キウノ森

此嶽、由来不」伝。

12、マウノヲヒヤ火神（公儀祈願所）　（勢理客村）

13、タノカミ嶽御イベ（同）

神名、ソノヒヤブ

14、大山御イベ（島中拝所）

神名、イシュマンセヂアラ森

伊是名島の聖地の場合も火神とイベから成っているが、伊是名村では火神が後に記されている。神名がイベにのみあるのは伊平屋島と同様である。その神名も13のソノヒヤブ以外は「森」を称している。しかし重複する神名はない。ただ2の「アフリ森」は伊平屋島にあったし、3の「コシアテノ中森」はその「コシアテ森」に類似している。

1の「スゞノ森」は『琉球国旧記』に「鈴森」とある。鈴は『おもろさうし』に「すつかね」「すつなり」などの語があり、祭具・神女・船の名などを表している。ここも鈴の神聖性から呼ばれたものであろう。2の「アフリ森」は伊平屋島のそれを参照。

3の「コシアテノ中森」は、「コシアテ」についてはやはり伊平屋島の項を参照、「中森」は久高島に「中森ノ嶽」という御嶽がある。また『おもろさうし』には、「かてかわの中もり」（久米島）・「きやむもりの中もり」（具志川村）・「とよむ中もり」（奄美大島）の例が見られる。御嶽の名としては広くあったのだろう。ここはそれが複合した神名となっている。

4の「伊是名森」は伊是名城内にあるミヤ（庭）の聖地をそのまま神名にしている。5も同城内のもの。「スエノ森」の「スエ」は「末」または「精」であろう。オモロ語ではこれらは子孫や霊力の意で用いられる。6も同城内のものである。「真玉森」の「真玉」はやはりオモロ語では、美しい・貴重ななどの美称辞、マダマモリで首里城内の御嶽の一つを指すことがあり、首里城そのものを指す

ことがある。またマタマウチで久米島の具志川城を指すこともある。こうしたことからして、ここは聖地の美称がそのまま神名となったのだろう。7～10はいま不要。

11の「キウノ森」はむつかしい。「キウ」は人をいうキョなのか、オモロ語の「キヤウ」つまり京なのか。オモロ語の「キヤウノウチ」は京の内で、首里城内の聖域を言う。12もいま不要。

13には「森」が付かない点で他と異なる。「ソノヒヤブ」はすぐに首里の園比屋武御嶽を思い起こさせる。これは伊是名島から勧請したもので、もと降雨灌漑を司る神であったのが、国王出御の時などの祈願がなされるようになったという。伊是名島の御嶽名がタノカミ、つまり田の神だから、降雨灌漑を司るというのはわかるが、それがソノヒヤブとどう関わるのだろうか、今帰仁城にはカナヒヤフ（金比屋武）という拝所があり、語構成が似ているから、ここも拝所の名がそのまま神名として呼ばれたものであろうか。

14の「イシュマンセヂアラ森」は、『琉球国旧記』に「威勢万世底新森」とある。「イシュ」はオモロ語の「イセ」、つまりすぐれた・りっぱななどという美称辞、マンも美称辞、「セヂ」は霊力、オモロ語のセチアラは霊力が豊かに満ちたの意である。するとこの神名は霊力のすぐれたことをほめたたえたことになる。しかしこうした呼称は、伊平屋島・伊是名島の神名としては他に例がない、珍しいものである。

『琉球国由来記』の「年中祭祀」をみると、二月の田植ヲリメには6、十一月の海神折目には4、十二月には13での祭祀がある。そして十二月の時のミセゞルには4・5が、また田植ヲリメの時にはミセゞルに4・6、雨乞の時にはミセゞルに4・6、ノダテ事に4・6、そして一夜籠もりの時のミセゞルには13がうたい込まれている。聖地での祭りと神との関わりの一端が理解できる。（未完）

＊平成十年度跡見学園特別研究助成費による成果の一部である。